



Vision

Women in Science

東京女子医科大学生理学教室 教授

川上 順子

2007年2月のニュースに米国 Harvard 大学学長に米国史を専門とする Drew Gilpin Faust が選出された記事がのり、28代学長にして初めての女性学長として話題をさらった。このニュースの背景には Lawrence H. Summers 前学長の 2005 年「Task Force on Women in Science and Engineering」における女性科学者に対する発言をめぐる論争があるのだろうか。2005 年 Harvard 大学では、女性 Faculty の少なさを問題としてとりあげ、将来、其の割合を是正するための、調査、提案を行う研究班を立ち上げた。このこと自体、科学分野における米国での男女格差是正の困難さを示しており、日本の女性科学者は、「米国ですらこれか」という思いと「これで状況は変化するか」という期待の両方を抱いた人が多かったのではないだろうか。因みに、世界経済フォーラムの発表による男女格差指標では米国は 22 位、日本は 79 位である。この研究班の膨大な資料と報告書は Web 上に公開されている。興味のある方はごらんいただきたい。また、最近提案されている文部科学省の女性研究者支援のグラント申請にも役に立つと思われる (Report of the Task Force on Women Faculty Executive Summary, May 2005)。この研究班の chairs の一人が、今回学長となった、当時 Radcliffe Institute Advanced Study の学部長であった Prof. Faust であった。

ここまでは、米国 Harvard 大学の男女格差是正への努力は普通のことであり、何事もなく進行す

るものと思われていた。ところが、Lawrence H. Summers 前学長が 2005 年 1 月 14 日に米国経済調査局 (NBER) の [Diversifying the Science & Engineering Workforce] conference でした発言が性差別との批判があがり、Lawrence H. Summers 前学長の反論にもかかわらず、大学の人文科学部教授会から不信任決議を出される事態となった。このカンファレンスは closed (後日発表原稿が公開されたが、そのなかでも unofficially と表現されている) であったにもかかわらず、これだけの反響を引き起こした。ここまで書くと、某大臣の女性に関する不用意な発言で国会が紛糾した最近の事件が思い出される。これらの事件は、一般社会全体に男女格差に関する感心が高まっている事を示すものであり、公的立場にある男女は、どのような場であれこのような発言に細心の注意を払う必要があることを示している。この closed のカンファレンスでの発言に対して、Summers 前学長は 19 日に釈明のアナウンスを出している。

それでは、Lawrence H. Summers 前学長の発言はどのようなものであったのか、Science (2005, 308: 601) の Editorial にも関連記事が載っていたので、読まれた方もおられることと思う。Summers 前学長は、トップレベルの女性科学者が少ない理由を 3 つ上げ、其の重要度を以下のように設定していることである。(1) 女性自身が大変な仕事を嫌って大学や研究所でのポジションに就きたがらない (high-powered job hypothesis) (2) 男女

の本来の生まれつきの才能の違い（女性は科学に向かない）(3)社会的要因，社会の類型的差別による理由。これらの項目自体にも反論はあるが，この重要度の順番の挙げ方にまず不満がある。Harvard 大学の学長として社会的要因による女性科学者の少ないことより，女性自身の問題に焦点を置いていることは問題である。女性科学者が働く時間に制限を受けるのは，多くの場合，出産，保育などの負担が大きい事が基盤にあり，これを語らずに仮説を展開するのは問題の本質を見誤る事になる。さらに，この原稿で多くの人が問題としているのは，女性の科学者，特にアカデミックポジションを得ている女性が少ない理由の一つに，女性本来（genetic）の特質があるかもしれないと挙げていることが，科学を専門として努力している若い女性科学者や女子学生の意欲をそぐものであるということであろう。Science 誌はアカデミックポジション保持者の女性科学者が少ない理由が genetic であるという証拠は社会的，習慣

的な影響であるとの膨大な証拠の中に意味をなくしていると書いている。日本ではどうかといえば，女性はどのような大学，職業も自由に選択できる反面，若い人の中のキーワードとして「かわいい」が挙げられるなど，一般社会における男女格差感覚はまだ平等からは遠いものがありそうである。これが，世界経済フォーラム男女格差指標 79 位の原因であるかもしれない。日本では「女性科学者の会」「生理学女性研究者の会 WPJ」を始め，多くの女性研究者のあり方を考え，環境の改善を支援する組織が増えてきている。さらに，女性研究者支援の補助金も設定されるようになり，これらを利用して多くの科学分野を目指す女子学生が増え，若手女性科学者が活躍をする場が広がるチャンスが多くなっている。いつの日か，女性研究者の環境が整い，男女格差が消滅し，女性であることを考えずに研究ができる日が来る事を期待している。